

二少女

国木田独歩

青空文庫

上

夏の初、月色街ちまたに満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆるそうな吾妻あずま下駄げたの音高く、芝琴平しばこんびらしや社の後のお濠うゑばたを十八ばかりの少女むすめ、赤坂あかさかの方から物案じそうに首をうなだれて来る。

薄闇い狭いぬけろじの車くるま止どめの横木を俛くゞつて、彼方むこうへ出ると、琴平社の中門の通りである。道幅二間ばかりの寂しい町で、(産婆)と書いた軒燈がすが二階造の家の前に点つている計りで、暗夜やみよなら真闇まつくら黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日で、中門ちゅうもんを出で入はいりする人の多少すこしは通るが、実、平常ふだん、此町に用事のある者でなければ余り人の往来ゆききしない所である。

少女むすめはぬけろじを出るや、そつと左右を見た。月は中天に懸かつていて、南から北へと通つた此町を隈なく照らして、森しんとしている。人の住んで居ない町かと思われる程で、少女が(産婆)の軒燈の前まで来た時、其二階で赤児あかんぼの泣声が微かにした。少女は頭を上げてちよつと見上げたが、其儘すぐ一軒置おいた隣家となりの二階に目を注いだ。

隣家の二階というのは、見た処、極く軒の低い家で、下の屋根と上の屋根との間に、一間の中窓が窮屈そうに挟まっている、其窓先に軒がさも鬱陶しく垂れて、陰気な影を窓の障子に映じている。

少女は此二階家の前に来ると暫時く佇止つて居たが、窓を見上げて「江藤さん」と小声で呼んだ、窓は少し開いて、薄赤い光が煤に黄んだ障子に映じている。

「江藤さん、」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小声で呼んだ。

障子がすつと開いたかと思うと、年若い姿が腰から上を現わして、

「誰だ？」

「私。」

「オヤ、田川さん。」

「少し用事が有て来たのよ、最早お寝？」

「オヤそう、お上がんさいよ、でも未だ十時が打たないでしょう。」

「晩く来てお気の毒様ねエ」と少女は少しもじもじして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音がゴトゴトして、建付の曲んだ戸が漸と開いた。

「オヤ好い月だね、田川さんお上がんさいよ」という女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、氣高い顔つき、髪は束髪に結んで身には洗あら曝いざらしの浴衣を着けて居る。

「ちよつと平岡ひらおかさんに頼まれて来た用があるのよ、此処でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座ながくなるから。……」と今来た少女は言つて、笑を含ふくんでいる。それで相手の顔は見ないで、月を仰あおいだ目元は其丸顔に適好ふさわしく、品の好い愛嬌のある小軀こからの女である。

「用というのは大概解つて居ますが、色々話もあるから一寸お上んさいよ。」

「そう、あの局の歸りに来ると宜いんだけど、家に急ぐ用が有ったもんだから……」
 といひ乍ら二人は中に入はいつた。

入ると直ぐ下駄直しの仕事場で、脇の方に狭い階段はしごだんが付いて、仕事場と奥とは障子で仕切きつてある。其障子が一枚開あかつていたが薄闇くつて能く内が見えない。

「遅く来あつて御氣毒様、」と来た少女は輕かろく言つた、奥に向むかつて。

「どう致いたしまして、」と奥で噺しわがれた声がして、続つづいて咳嗽せきがして、火鉢の縁をたたき煙管きせるの音が重く響いた。

「この乱暮さを御覽なさい、座る所もないのよ。」と主人あるじの少女はみしみしと音のする、

急な階段を先に立て陞つて、

「何卒ぞ此処へでも御座わんなさいな。」

と其処らの物を片付けにかかる。

「すこし頼まれた仕事を急いでいますからね、……源ちゃん、お床を少し寄せますよ。」

「いいのよ、其様してお置きなさいよ、源ちゃん最早お寝み、」と客の少女は床なる九歳ばかりの少年を見て座わり乍ら言つて、其のにこやかな顔に笑味を湛えた。

「姉さん、氷！」と少年は額を少し挙げて泣声で言つた。

「お前、そう氷を食べて好いかね。二三日前から熱が出て困つて居るんですよ。源ちゃん
そら氷。」

主人の少女は小さな箱から氷の片を二ツ三ツ、皿に乗せて出して、少年の枕頭に置いて、
「もう此限ですよ、また明日買つてあげましょうねエ」

「風邪でもおひきなさつたの！」と客なる少女は心配そうに言つた。

「もう快々ですよ。熱いこと、少し開けましょねエ」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。今まで蒸熱かつた此一室へ冷たい夜風が、音もなく吹き込むと「夜風に当たると悪いでしょうよ、私は宜いからお閉めなさいよ、」と客なる少女、少年の病気を気にする。

「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用というのは欠勤届のことでしよう、」
と主人の少女は額から頬へ垂れかかる髪をうるさそうに撫であげながら少し体軀を前に屈めて小声で言った。

「ハア、あの五週間の欠勤届の期限が最早きれたから何とか為さらないと善くないツて、平岡さんが、是非今日私に貴姉のことを聞いて呉れろツて、……明朝は私が午前出だもんだから……」

「成程そうですねエ、真実に私は困まツちまツたねエ、五週間！ もう其様になつたらうか、」と主人の少女は嘆息をして、「それで平岡さんが何とか言つて？」

「イイエ別に何ともお仰らないけエど、江藤さんは最早局を止すのだろうかつて。貴姉どうなさるの。」

「ソー、夫れで実は私も迷つているのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

客の少女は密と室内を見廻した。そして何か思い当ることで有るらしく今まで少し心配そうな顔が急に爽々して満面の笑味を隠し得なかつたか、ちよツとあらたまつて、
「実は少々貴姉に聞て見ることがあるのよ、」

と一段小声で言った。

「何に？」と主人の少女も笑いながら小声で言った。これも何か思い当る処あるらしく、客なる少女の顔をじつと見て、又た密と傍の寢床を見ると、少年は両腕を捲り出したまま能く眠っている、其手を静に臥被の内にに入れてやった。

「怒ちや善けないことよ」と客の少女はきまり悪るそうに笑って言出し兼ねている。

「凡そ知ッているのよ、言て御覽なさい、怒りも何もしないから。可笑な位よ、」と言う主人の少女の顔は羞恥はづかしそうな笑のうちにも何となく不穩のところが見透かされた。

「私の口から言い悪くいけれど……貴姉大概解かっていきましょう……」

「私が妾になるとか成つたとかいう事なんでしょう。」

と言つた主人の少女の声は震えて居た。

下

此二人の少女は共に東京電話交換局の交換手であつて、主人の少女は江藤お秀とうきようでんわこうくわんきよくという、客の少女は田川お富たがわとみといい、交換手としては兩人とも老練の方であるがお秀は局を勤めるようになった以来、未だ二年許りであるから給料は漸と十五銭であつた。

お秀の父は東京府とうきょうふに勤めて三十五円ばかり取つて居て夫婦の間にお秀を長女かしらとしてお梅源三郎うめんざぶろうの三人の児もつを持て、左まで不自由なく暮らしていた。夫れでお秀も高等小学校を卒えることが出来、其後は宅うちに居て針仕事の稽古きこのみに力を尽す傍かたわら、読書をも勉めていたが恰度三年前、母が病やみついで三月目に亡くなって、夫れを嘆く間もなく又た父が病床とこに就くように成りこれも二月ばかりで母の後を逐い、三人の児は半歳のうちに両親ふたおやを失つて忽ち孤児みなしごとなつた。そうして殆ど丸裸体の様で此世に残された。

そこで一人の祖母は懇意な家で引うけることになり、お秀は幸い交換局の交換手つを募て居たから直ぐ局に勉めるつとようになって、妹と弟は兎も角お秀と一所に暮らしていた。それも多少は祖母を引うけた家から扶助みづいでもらつて僅かに糊口くちを立てていたので、お秀の給料と針仕事とは三人の口はとても過活すぐされなかつた。しかしお秀の労働ほねおりは決して世の常の少女の出来る業ではなかつた。あちら此方と安値やすそうな間を借りては其処から局に通つて、午前出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも安息やすむ暇がないうちにも弟を小学校に出し妹に自分で裁縫の稽古をしてやり、夜は弟の復習さうえも驗みてやらねばならず、炊事いたきから洗濯から皆な自分一人の手でやっていた。

其うち物価ものは次だん第、高くなり、お秀三人の暮くらは益々困難に成つて来た。如何どうするだろ

うと内々局の朋輩も噂していた程であつたが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周圍小ざつぱり清潔として左まで見悪い衣装もせず、平気で局に通つていたから、奇怪なことのよう
に朋輩は思つて中には今の世間に能くある例を引て善くない噂を立てる連中もあつた。

すると一月半ばかり前からお秀は全然局に出なくなつた。初は一週間の病氣届、これは正規で別に診断書が要らない、其次は診断書が付て五週間の欠勤。其内五週間も経た、お秀は出て来ないのみならず、欠勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾になつたという噂が誰の口からともなく起つて、朋輩の者皆んな喧噪く騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入つた。そこで技手の平岡は田川お富に頼んで、お秀の現状を見届けた上、局を退くとも退かぬとも何とか決めて呉れろと伝言さしたのである。お富は朋輩の中でもお秀とは能く氣の合て親密しい方であるからで。

しかしお秀が局を欠勤でから後も二三度会つて多少事情を知つて居る故、かの怪しい噂は信じなかつたが、此頃になつて、或という疑が起らなくもなかつた。というのもお秀の祖母という人が余り心得の善い人でないことを兼ねて知つてゐるからで。

お富はお秀の様子を一目見て、もう殆ど怪しい疑惑は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見てすっかり解かつた。

お秀の如何に困つて居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部屋には戸棚というものがないからお秀は其衣類を柳行李二個に納めて室の片隅に置いていたのが今は一個も見えない、そして身には浴衣の洗曝を着たままで、別に着更えもない様な様である。六畳の座敷の一畳は階子段に取られて居るから実は五畳敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つもない。

天井は低く畳は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは真実の呼吸ぬかしという丈けで、室のうち何処となく陰鬱で不潔で、とても人の住むべき処でない。

簿記函と書た長方形の箱が鼠入らずの代をしている、其上に二合入の醤油徳利と石油の罐とが置いてあつて、箱の前には小さな塗膳があつて其上に茶碗小皿などが三ツ四ツ伏せて有る其横に煤ぼつた涼炉が有つて凸凹した湯罐がかけてある。涼炉と膳との蔭に土鍋が置いて有て共に飯匕が添えて有るのを見れば其処らに飯桶の見えぬのも道理である。

又た室の片隅に風呂敷包が有つて其傍に源三郎の学校道具が置いてある。お秀の室の道具は実にこれ限である。これだけがお秀の財産である。其外源三郎の臥て居る布団というのは見て居るのも気の毒なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になつたのだろうか、女の節操を売てまで金銭が欲い者が如何して如此な貧乏しい

有様だろうか。

「江藤さん、私は決して其様なことは真実にしないのよ。しかし皆なが色々なことを言っていますから或と思つたの。怒つちや宜ないことよ、」とお富の声も震えて左も氣の毒そうに言つた。

「否工、怒るところか、貴姉宜く来て下すつて真実に嬉れしう御座います、局の人が色々なことを言っているのは薄々知っていましたが、私は無理はないと思いますわ……」と、

さも悲しげにお秀は言つて、ほつと嘆息を吐いた。

「何故。私は口惜いことよ、よく解りもしないことを左も見て来たように言いふらしてさ。」

「私だつて口惜いと思わないことはないけエど、あんな人達が彼是れ言うのも尤ですよ、

貴姉……祖母さんね……」

とお秀は口籠つた、そしてじつとお富の顔を見た目は湿んでいた。

「祖母さんが何とか言つたのでしょうか……真実に貴姉はお可哀そうだよ……」とお富の眼も涙含んだ。

「祖母さんのことだから他の人には言えないけれど……そら先達貴姉の来ていらしやつた

時、祖母さんがあんな妙なことを言つたでしょう。処が十日ばかり前に小石川こいしがわから来て私に妾になれと言わないばかりなのよ、あのお前の思案かんがえ一つでお梅や源ちゃんにも衣服きものが着せてやられて、甘味おいしものが食べさされるツて……」

「それで妾になれツて？」お富は眼眶まぶちを袖で摩つて丸い眼を大きくして言つた。

「否い、妾になれツて明白はつきりとは言わないけれど、妾々ツて世間で大変悪く言うが芸者なんかと比較くらべると幾何いくばいいか知れない、一人の男を旦那にするのだからツて……まあ何という言葉でしょう……私は口惜くちやくくツて堪りませんでしたの。矢張身を売るのは同じことだと言いますとね、祖母さんや同胞きょうだいのために身を売るのが何が悪いツて……」

「まあ其様そんななことを！」

「実じつ、私も困り切きつているに違いないけエど、いくら零落おちふれしても妾になぞ成る気はありませんよ私には。そんな浅間せんましいことが何で出来ましようか。祖母さんに、どんな事が有ツても其様そんなな真似は私はしない、私のやれる丈けやつて妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなど言切ツて其時あんまり口惜くちやくかつたから泣きましたのよ。それからね寧いっそのこと針仕事の方が宜いかと思ツて暫時局しばらくを欠勤やすんでやつて見たのですよ。しかし此頃いまに成ツて見ると矢張仕事ばかりじゃア、有る時や無い時が有ツて結極つまりが左程の事も無いようだし、そ

れに家にばかりいるとツイ妹や弟の世話が余計焼きたくなって思わず其方それに時間を取られるし……ですから矢張半日ずつ、局に出ることに仕ようかとも思つて居たところなんですよ。」

「そしてお梅さんはどうなすつて？」とお富ふしぎは不審そうに尋ねた。

「ですから、今の処、とても私一人の腕で三人はやりきれない！ 小石川の方へも左迄は請求たのまれないもんですから、お梅だけは奉公に出すことにして、丁度一昨々さきおととい日か先方むこうへ行きましたの。」

「まあ何処へなの？」

「じき其処ひかげちようなの、日蔭町の古着屋なの。」

「おさんどんですか。」

「ハア。」

「まあ可哀そうに、やつと十五でしよう？」

「私も可哀そうでならなかつたけエど、つまり私の傍に居た処が苦しいばかりだし、又た結局つまりあの人も暫時しばらくは辛い目に遇あつて生育そだつのですから今時分から他人の間に出るのも宜かろうと思つて、心を鬼にして出してやりました、辛抱が出来ればいいがと思つて、……それ

源ちゃんは斯様^{こんな}だし、今も彼の裁縫^{しごと}しながら色々なことを思うと悲しくなつて泣きたく成^{なつ}て来たから、口のうちに唱歌を歌つてまぎらしたところなの。」

「そして貴姉、矢張局にお出^{いで}なさいな。その方が宜いでしようよ。それに局に出て多忙^{いそがし}の間だけでも苦勞を忘れますよ」とお富は真面目にすすめた。お秀は嘆息ついて、そして淋^{しみ}びしそうな笑を顔に浮かべ、

「ほんに左様^{そう}ですよ、人様のお話の取次をして何番々々と言って居るうちに日が立ちますからねエ」と言つて「おほほほ」と軽く笑う。「女の仕事はどうせ其様^{そのん}なものですわ、」とお富も「おほほほ」と笑つた。そしてお秀は何とも云い難^{にく}い、嬉しいような、哀れなような、頼^{たの}もしいような心持がした。

兎も角も明後日^{あさつて}からお秀は局に出ることに話を極めてお富に約束したものの、忽ち衣類^{きもの}の事に思い当つて当惑した。若い女ばかり集まる処だからお秀の性質でもまさかに寢衣^{ねまぎ}同様の衣服^{きもの}は着てゆかれず、二三枚の単物は皆な質物^{しち}と成っているし、これには殆ど当惑したお富は流石女同志だけ初めから氣が付いていた。お秀の当惑の色を見て、

「氣に障^さえちやいけないことよ、あの……」

「何に、どうにか致しますよ」とお秀は少し顔を赤らめて、「おほほほ」と笑つた。

「だつてお困りでしょう？　明日あした私が局から帰つたら母上おつかさんと相談して……四時頃又来ましようよ。」

「あんまりお気の毒さまで……」

お秀は眼に涙一杯含ませて首を垂れた。お富は何とも言い難い、悲しいような、懐かしいような心持がした。

夜が大分更けたようだからお富は暇を告げて立ちかけた時、鈴虫の鳴く音が突然へや室のうちにでした。

「オヤ鈴虫が」とお富は言つて見廻わした。

「窓のところに。お梅さんが先達せんだつて琴平こんびらで買つて来たのよ、奉公に出る時持もつてゆきたいつて……。」

「まだ小供ですもの、ねえ」とお富は立て二人は暗い階段はしごだんを危なそうに下り、お秀も一所に戸外そとへ出た。月は稍や西に傾いた。夜は森しんと更けて居る。

「そこまで送りましょう。」

「宜いのよ、其処へ出ると未だ人通りが沢山あるから」とお富は笑つて、
「左様なら、源ちゃんお大事に、」と去きかける。

「御壕の処まで送りましょうよ、」とお秀は関わらず同伴に来る。二人の少女の影は、薄暗いぬけろじの中に消えた。

ぬけろじの中程が恰度、麵包屋の裏になつていて、今二人が通りかけると、戸が少し開て居て、内で麵包を製造つてゐる処が能く見える。其焼たての香しい香が戸外までぶんぷんする。其焼く手際が見えて面白いほどの上手である。二人は一寸と立てみていた、

「お美味そうねエ」とお富は笑つて言つた。

「明朝のを今製造えるのでしょうねエ」とお秀も笑うて行こうとする、

「ちよつと御待ちなさいよ」とお富は止めて、戸外から、

「その麵包を少し下さいな。」

三十計りの男と十五位な娘とが頻に焼ていたが、驚て戸外の方を向いた。

「お幾俣？」

娘は不精無精に立つた。

「お気の毒さま、これ丈け下さいな、」とお富は白銅一個を娘に渡すと、娘は麵包を古新聞に包んで戸の間から出した。

「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが食べさせたいことねエ、そら熱いですよ。」

とお秀に渡す。

「まあお気の毒さまねエ、明朝のお目覚めにやりましょう。」

二人はお壕^{ぼた}辺の広い通りに出た。夜が更けてもまだ十二時前であるから彼方^{あちら}此方^{こちら}、人のゆききがある。月はさやかに照^{てり}て、お壕の水の上は霞んでいる。

「左様なら、又た明日^{あした}。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富はしとやかに辞儀して去^ゆこうとした。

「どうも色々有難う御座いました。お母上^{つかさん}にも宜しく……それでは明日^{あす}。」

二人は分れんとして暫時^{しばらく}、立止った。

「あア、明日^{あす}お出^{いで}になる時、お花を少し持^{もつ}て来て下さいませんか、何んでも宜いの。仏様にあげたいから」

とお秀は云い悪^{にく}くそうに言つた。

「此頃は江戸菊^{えどぎく}が大変よく咲^{さい}ているのよ、江戸菊を持^{もつ}て来ましようねエ。」とお富は首をちよつと傾^{かし}げてニコリと笑つて。

「貴姉の処に鈴虫が居て？」

「否^いエ、どうして？」

「梅ちゃんの鈴虫が此頃大變鳴かないようになって、何だか死にそうですから、どうしたら宜いかと思つて。」

「そう、胡瓜をやつて？」

「ハア、それで死にそうなのよ」

と言つてゐる処へ、巡査が通り掛つて二人の様子を怪しそうに見て去つた。二人は驚いて、

「左様なら……」

「左様なら……急いでお歸なさいよ……。」

お富はカラコロカラコロと赤坂の方へ歸つてゆく、お秀はじつと其後影を見送^{みおく}て立^たて居た。(完)

(発表年月不詳「濤声」より)

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学大系 序」三一書房

1955（昭和30）年3月31日第1版発行

1961（昭和36）年6月20日第2刷発行

※底本に見る旧仮名の新仮名への直し漏れは、あらためた上で注記した。

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2001年12月27日公開

2004年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二少女

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>